

インド仏教と靈魂

鈴木 隆泰[†]

1. 「毒矢の譬え」

『小マールンキヤ經 *Cūḷamāluṅkiyasuttanta* (中部經典 *Majjhima-Nikāya* i. 426.8-432.5)』

比丘マールンキヤープッタの悩み

- ・ 世界は永遠か (sassato loko)
- ・ 世界は永遠でないか (asassato loko)
- ・ 世界は有限か (antavā loko)
- ・ 世界は無限か (anantavā loko)
- ・ いのち (靈魂) と肉体は同一か (taṃ jīvaṃ taṃ sarīraṃ)
- ・ いのち (靈魂) と肉体は別異か (aññaṃ jīvaṃ aññaṃ sarīraṃ)
- ・ 如来は死後存在するか (hoti tathāgato param-maraṇā)
- ・ 如来は死後存在しないか (na hoti tathāgato param-maraṇā)
- ・ 如来は死後存在しながらしかも存在しないか (hoti ca na ca hoti tathāgato param-maraṇā)
- ・ 如来は死後存在するのでもなく存在しないのでもないのか (n' eva hoti na na hoti tathāgato param-maraṇā)

〔比丘マールンキヤープッタ〕「これら十個の疑問に世尊が答えてくれれば、自分は清らかな修行 (梵行 brahmacarya。不婬に基づく出家修行) を続けよう。もし答えてくれないのであれば、自分は還俗してしまおう。」

〔釈尊〕「マールンキヤープッタよ、もし“世尊がこれらの疑問に答えてくれないのであれば、自分は清らかな修行を實踐しない”という者があれば、その者は答えを得る前に死んでしまうであろう。」

そして 毒矢の譬え

「ある男が毒矢で射られた。彼の友人や同僚や親戚の者たちは、彼を医師に手当てさせようとした。ところが射られた当の本人は、

“私を射た者〔のヴァルナ (四姓)〕はクシャトリヤ (王族、武人) 階級か、バラモン (司祭) 階級か、ヴァイシャ (庶民) 階級か、シュードラ (隷民) 階級か”

“私を射た者の名は何か、姓は何か”

“私を射た者は背が高いか、背が低い、それとも中くらいか”

“私を射た者の肌色は黒か、褐色か、金色か”

“私を射た者はどの村、どの町、どの都市に住んでいるのか”

[†] 東京都善應院、山口県立大学

“私を射た弓は普通の弓か、それとも石弓か”

“私を射た弓の弦の素材はアッカ草か、サンタ草か、動物の腱か、マルヴァー麻か、キーラパンニン草か”

“私を射た矢の矢柄の素材はカッチャ葦か、それともローピマ葦か”

“私を射た矢の矢柄につけられた羽は鷲の羽か、アオサギの羽か、鷹の羽か、孔雀の羽か、シティハラヌ鳥の羽か”

“私を射た矢の矢柄に巻いてある腱は牛のものか、水牛のものか、鹿のものか、猿のものか”

“私を射た矢は普通の矢か、クラッパか、ヴェーカンダか、ナーラーチャか、ヴァッチャダタか、カラヴィーラパッタか”

これらが全て判明しないうちは、自分はこの矢を抜かない、と言ったとしたら、その男はその答えを得る前に死んでしまうであろう。マールンキヤーブッタよ、そなたも全く同様である。(中略)

マールンキヤーブッタよ、“靈魂と肉体は同一である”という見解 (dṛṣṭi) があるならば、清らかな修行を实践しよう、というのは正しくない。“靈魂と肉体は別異である”という見解があるならば、清らかな修行を实践しよう、というのも正しくない。“靈魂と肉体は同一である”という見解があろうが、“靈魂と肉体は別異である”という見解があろうが、いずれにせよ生・老・〔病・〕死等〔の苦〕があり、私は現世においてそれらを制圧せよと教示する。(中略)

それゆえマールンキヤーブッタよ、私が説かなかったことは 説かなかったこととして受け止めなさい。私が説いたことは 説いたこととして受け止めなさい。

ではマールンキヤーブッタよ、私が説かなかったことは何か。マールンキヤーブッタよ、“靈魂と肉体は同一である”と私は説かなかった。“靈魂と肉体は別異である”とも私は説かなかった。(中略)

マールンキヤーブッタよ、なぜ私はこれらのことを説かなかったのか。マールンキヤーブッタよ、それは、目的に合わず、清らかな修行の緒とならず、〔苦からの〕厭離、貪欲を離れること、〔無明の〕制圧、勝れた智である全き覚り、寂滅の境地である涅槃 (ニルヴァーナ nirvāṇa) へとは通じないからである。

ではマールンキヤーブッタよ、私が説いたことは何か。マールンキヤーブッタよ、“これが苦である (苦諦)”と私は説いた。“これが苦の原因である (集諦^{じゅうたい})”と私は説いた。“これが苦の制圧である (滅諦)”と私は説いた。“これが苦の制圧へと至る道である (道諦)”と私は説いた (四聖諦 catur-ārya-satya)。

マールンキヤーブッタよ、なぜ私はこれらのことを説いたのか。マールンキヤーブッタよ、それは、目的に適い、清らかな修行の緒となり、〔苦からの〕厭離、貪欲を離れること、〔無明の〕制圧、勝れた智である全き覚り、寂滅の境地である涅槃へと通じるからである。

それゆえマールンキヤープッタよ、私が説かなかったことは 説かなかったこととして受け止めなさい。私が説いたことは 説いたこととして受け止めなさい。」

このように世尊に説かれて、比丘マールンキヤープッタは納得し、世尊の教えに歓喜した。

仏教は実利主義的？

「靈魂や死後の世界を考えることは、^{さと}覚るために無益」 私たちを萎縮させてきた。

2. 「無我説」は靈魂の否定か

初転法輪における「諸法無我説」(『律蔵 *Vinaya-piṭaka*』 i. 13.18-14.26)

〔釈尊〕「比丘たちよ、身体(物質、色。ルーパ rūpa)はアートマン(ātman。自己の本体、靈魂)ならざるもの(非我)である。もし身体がアートマンであるならば、身体は病に罹ることはないはずである。また、“私の身体はこのようであれ”とか“私の身体はこのようでないように”ともなしうるであろう。しかし身体はアートマンではないから、身体は病にも罹るし、“私の身体はこのようであれ”とも“私の身体はこのようでないように”ともなしえないのである。

感受作用(受。ヴェーダナー vedanā)はアートマンならざるもの(非我)である。

(中略)

表象作用(想。サンジュニャー saṃjñā)はアートマンならざるもの(非我)である。(中略)

形成作用(行。サンスカーラ saṃskāra)はアートマンならざるもの(非我)である。(中略)

認識作用(識。ヴィジュニャーナ vijñāna)はアートマンならざるもの(非我)である。(中略)

比丘たちよ、汝らはどう考えるか。身体は常住であろうか、それとも無常であろうか。」

〔比丘たち〕「身体は無常であります。」

〔釈尊〕「では、無常であるものは思い通りにならないか、それとも思い通りになるか。」

〔比丘たち〕「思い通りになりません。」

〔釈尊〕「では、無常であって思い通りにならず、損壊する性質を持つ〔身体〕を、どうして“これはわたしのものである”とか“これがわたしである”とか“これがわたしのアートマンである”などに見なすことができようか。」

〔比丘たち〕「いいえ、できません。」

〔釈尊〕「感受作用は(中略)、表象作用は(中略)、形成作用は(中略)、認識作用は常住であろうか、それとも無常であろうか。」

〔比丘たち〕「無常であります。」

〔釈尊〕「では、無常であるものは思い通りにならないか、それとも思い通りになるか。」

〔比丘たち〕「思い通りになりません。」

〔釈尊〕「では、無常であって思い通りにならず、損壊する性質を持つものを、どうして“これはわたしのものである”とか“これがわたしである”とか“これがわたしのアートマンである”などに見なすことができようか。」

〔比丘たち〕「いいえ、できません。」

〔釈尊〕「それゆえに、ありとあらゆる身体、感受作用、表象作用、形成作用、認識作用は（中略）“これはわたしのものではない”“これはわたしではない”“これはわたしのアートマンではない”と、如実に、正しい智慧をもって理解しなくてはならない。」

無我説：五蘊はアートマンではない、という説。

正確には、諸法無我ではなく、五蘊非我。

アートマンの存在否定にあらず、五蘊以外にアートマンが存在する可能性を残す。

ただし現存するパーリ仏典では、アートマンがある、と明言してはいないのも事実。

3. 霊魂を説いた部派が存在していた

犢子部（ヴァーツシープトリーヤ）という部派が「ブドガラ（霊魂、アートマン）」の存在を主張。

犢子部はかつて相当の影響力を持っていたが、現在ではあまり知られていない。犢子部によればブドガラは、過去・現在・未来の三世にわたる業の担い手である輪廻主体として、有為法でも無為法でもないものとして実在していると主張。西北インドにおいて有力だった説一切有部（サルヴァースティヴァーディン）の教学によれば、一切法は有為法と無為法よりなる「五位七十五法」に分類され、その中にブドガラ（アートマン）は存在していない。

説一切有部の教学は、龍樹（ナーガールジュナ。一五〇 二五〇頃）と並ぶインド大乘仏教の大論師である世親（ヴァスヴァンドウ。四〇〇 四八〇頃）の著作『俱舎論（アビダルマコーシャ・バーシュヤ）』に詳しく紹介されている。

『俱舎論』は仏教の基礎学とされ、古来、仏教を学ぶ者は必ず通らなくてはならない関門。その教え、すなわち「一切法は有為法もしくは無為法のみ」という理解に立つとき、その範疇に含まれないブドガラが認められる余地はない。また、南アジア・東南アジアに広まった南伝上座仏教の大寺（マハーヴィハー

ラ)派も、犢子部のブドガラ実在説を異端の説として強く批判。
仏教の伝播は北伝(漢訳仏教圏)、南伝(パーリ語仏教圏)、チベット(チベット語仏教圏)に大別。これら三系統のいずれにおいても「有」の潮流が批判的に扱われた。

4. 日本人の他界観

日本人：死後の世界に並々ならぬ関心(畏れ)を抱く。
死者の魂には、死に起因する穢れ(死穢)が付着(例：お清めの塩)。きちんと浄化しないと、悪霊(祟り神)になってしまう。
死者の魂には生前の個性が反映される。怨みをもって死んだ人の魂は、特に悪霊になりやすい。崇徳上皇 1119-1164(日本一の大魔王)、菅原道真 845-903。
死者の魂をきちんと祀れば、浄化されて祖先神(ご先祖さま)となり、子孫を守護する。祟り神でも、浄化されれば善神になる。

5. 「仏説」とはなにか

「何であれ善く説かれたものであれば、それは全て釈尊の直説である。」¹(『増支部経典=アングッタラ・ニカーヤ』)これが仏教の根本的特性。

仏説 オールマイティな神の声(「ヨハネによる福音書」)

=時・処・人・苦悩・願いの違いに応じて、個々別々に処方された治療薬

「毒矢の譬え」 マールンキヤーブッタに対する治療薬。彼は“世界の謎全てが解決しない限り修行をしない”と宣言したに等しい。たとえ釈尊が彼の疑問十個全てに答えたとしても、マールンキヤーブッタはさらに別の疑問を次々と呈するであろうことを釈尊は見抜かれていた。

「マールンキヤーブッタには、私が説いたことだけが全てであり、それ以上は問うな、と受け止めさせよう」という釈尊の配慮。

先の「毒矢の譬え」における、「マールンキヤーブッタよ」という呼びかけの多用。“この教えはマールンキヤーブッタに向けたもの”と明言されている。

日本人の願い

日本では亡くなった方を神(祖先神、ご先祖さま)・仏(仏さま)として畏怖し、敬い、お祀りしてきた伝統がある。

「何であれ善く説かれたものであれば、それは全て釈尊の直説である。」

¹ yaṃ kiñci subhāsitaṃ/ sabban taṃ tassa bhagavato vacanaṃ arahato sammāsambuddhassa// (Aṅguttara-Nikāya iv. 164.7-9)

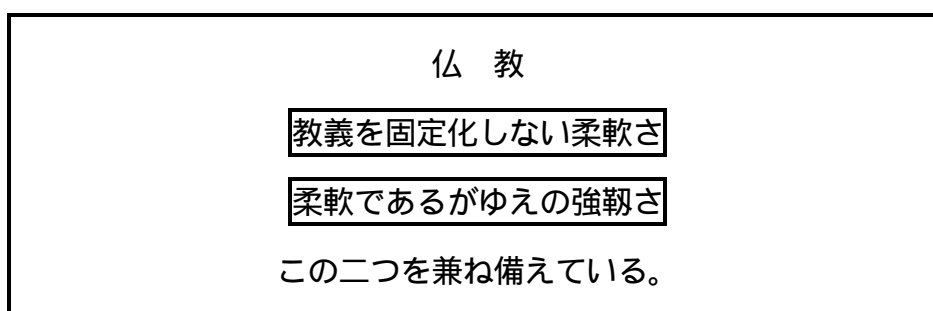
「方便 upāya (救済) の力」に基づいて生み出された、人々を救い、安寧に向わせる教えであれば、それを「釈尊の直説」と見なすのが仏教の根本的特性。

日本人が仏教に最も強く望んだのは、仏教の力をもって除災招福を実現するとともに、死者の魂を浄化し、祖先神を強化すること。

日本における葬式仏教は、日本人の心を安んじるため、方便の力が発揮されて形づくられた「釈尊の直説」に他ならない。

日本人は、亡くなった方が仏教の力をもって死穢が浄化され、清浄なご先祖さま・仏さまと成ることを願った。そしてご先祖さま・仏さまからの守護・加護を希った。これが日本人のエートス (気風 ethos)。

“世界の謎全てが解決しないと安心できない” という「マールンキヤープッタ的人間」ではなく、“魂・永遠のいのちがあると安心できる” や “死後の世界があると安心できる” という人には、霊魂の实在や死後の世界を堂々と説いたらよい。



6. 中道 とはなにか

初転法輪における 中道 (『律蔵 Vinaya-piṭaka』 i. 10.10-25)

比丘たちよ、出家修行者は二つの極端 (二辺 anta) を行なってはならない。(中略)

比丘たちよ、如来は二辺に近づくことなく、〔仏〕眼を生じさせ、〔仏〕智を生じさせ、勝れた智である全き覚り、寂滅の境地である涅槃へと通ずる 中道 madhyamā pratipad を、目の当たりに覚ったのである。

比丘たちよ、如来が目の当たりに覚ったところの、〔仏〕眼を生じさせ、〔仏〕智を生じさせ、勝れた智である菩提、寂滅の境地である涅槃と通ずる 中道 とは何かと言えば、それは八正道である。すなわち、

- 一、正見 (正しい教え saddharma に基づく正しい見解)
- 二、正思 (正しい見解に基づく正しい意業)
- 三、正語 (正しい意業に基づく正しい口業)
- 四、正業 (正しい意業に基づく正しい身業)
- 五、正命 (正しい三業に基づく正しい生活)

- 六、正精進（正しい生活に基づく正しい努力）
- 七、正念（正しい努力としての正しい注意力）
- 八、正定（正しく注意力を払い正しく 自分 を定める）

である。比丘たちよ、これが、如来が目当たりに覚ったところの、〔仏〕眼を生じさせ、〔仏〕智を生じさせ、勝れた智である全き覚り、寂滅の境地である涅槃へと通ずる 中道 なのである。

八正道において「何が正しいのか」が明示されていない点はとても重要。

相手を菩提・涅槃へと導く道が正しい道。 中道

相手を菩提・涅槃へと導く道（善く説かれたもの）であれば、それは全て仏説

7. 霊魂はあるのか

有無の二辺を離れる（『相応部経典 *Samyutta-Nikāya*』44・10）（取意）

“アートマンが存在する”と断定すると「常見（慢心の原因の一種）」に陥るし、
“アートマンが存在しない”と断定すると「断見（虚無主義の一種）」に陥る。

治療薬としての有我、無我（『中論頌 *Madhyamakakārikā*』18・6）

諸仏によって“アートマンは存在する”と暫定的に（治療薬として）説かれた。“アートマンは存在しない”とも〔治療薬として〕説かれた。

仏教徒全員に通用する真実（四法印や中道など）と同レベルで、種々の対象を
“ある” “ない”と断定することは、治療薬の固定となり、中道に反する二辺（極端 *anta*）となる。

「霊魂があることを仏教徒（インド、南アジア、東南アジア、チベット、中国、朝鮮半島、日本、その他）全員に通用する真実としても極端になり、霊魂がないことを仏教徒全員に通用する真実としても極端になる。」

個別の治療薬においては、霊魂（アートマン）も認められている。

アートマンの实在を説く経典の代表：『大乘涅槃経』や『勝鬘経』など（仏性 *buddhadhātu*・如来蔵 *tathāgatagarbha* = アートマン *ātman*）

日本仏教：仏性説が基本のひとつ

そして『楞伽経』は仏性と阿頼耶識（*ālayavijñāna*。業の担い手）を同一視。アートマン = 仏性 = 阿頼耶識 = 輪廻主体（いのち） = 霊魂

「初期仏典（原始仏典）は仏説、大乘仏典は非仏説」という誤解

非大乘、大乘を問わず、仏教における教説は全て個々別々の治療薬（ただし『法

華経』を除く²⁾)

『涅槃経 *Mahāparinirvāṇa-mahāsūtra*』(MPNMS 105b4-106a5)

〔迦葉菩薩〕「果たしてこの輪廻する世界に、アートマンはあるのでしょうか。それともないのでしょうか。」

〔釈尊〕「アートマンとは仏性のことである。仏性は一切衆生に存在する(一切衆生悉有仏性 *asti buddhadhātuḥ sarvasattveṣu)が、それは諸々の煩惱に覆われていて、自分の中に存在しているにもかかわらず、衆生はそれを見ることができないのである。

たとえばある村の貧しい者の家に、無尽蔵の金の鉱脈があったとしよう。そこには一人の婦人が住んでいたが、自分の家の地下に金の鉱脈があるとは知らず、貧しい生活を送っていた。そこで、人を導く術に長けたある人がその婦人に、“婦人よ、こちらに来なさい。私はあなたに報酬を与えるから、家事をやっておくれ”と言うと、彼女は“もしあなたが私の息子に宝を示してくれるなら、私は参りましょう”と応えたところ、(中略)彼は“お前の家には金の鉱脈があるにもかかわらず、お前は知らないのだ。(中略)”と言って、(中略)そこで彼は家の地下から金の鉱脈を取り出して彼女に与えたのである。彼女はそれを見て驚嘆し、彼に帰依をした。

それと同様に善男子よ、仏性(=アートマン)は一切衆生に存在するのだが、ただ見ることができないだけなのである。貧しい女〔の家の地下〕に金の鉱脈が存在していたように。」

^{だいほくきょう}
『大法鼓経 *Mahābherīsūtra*』(MBhS 95a5-6)

この『大法鼓経』もそれと同様〔に希有〕である。それはなぜかといえ、如来は入滅したにもかかわらず“依然として〔ここに〕住し続ける”と言い、アートマンも我がものという觀念(我所)もない〔と信じてきた〕者たちに向かって、今再び“アートマンはある”と説くからである。

『大法鼓経』(MBhS 115a8-b1)

一切衆生・一切生類に仏性がある、無量の妙なる相好によって莊嚴され光り輝いており、これを因として諸々の衆生は涅槃を得るのである。

『楞伽経 *Laṅkāvatārasūtra*』(LAS 220.13-14)

仏性は無始爾来、種々の煩惱にまとりつかれているので、アーラヤ識(阿頼耶識)と呼ばれる。

『宝性論 *Ratnagotravibhāga-mahāyānottaratantrasāstra*』(RGV 73.9-16)

仏性は(中略)思惟すべきものでも、分別すべきものでもなく、ただひたすら信

²⁾ 『全国布教師会連合会会報』27, 2015, pp. 3-37 参照。

解すべきものである。

『宝性論』(RGV74.1)

信によらなければ、諸仏の最勝の道理〔である仏性〕に通達することはできない。

『宝性論』(RGV115.3-4)

仏性(中略)は諸仏の境界であって、たとえ清浄な衆生であっても思議することは不可能である。

『勝鬘經 Śrīmālādevīsīṃhanādasūtra』(ŚMS 281-282)

〔勝鬘夫人〕世尊よ、本性清浄な仏性が、客塵煩惱きやくじんによって汚されていることは、諸仏の境界であって、思議することはできないものと私は思います。〕(中略)

〔釈尊〕「勝鬘夫人よ、まさにその通りである。(中略)ただ諸仏を信じるほかはないのである。」

8. ロゴスとパトスとエートス

ロゴス(理性 logos)とパトス(篤い信仰心 pathos)とエートス(気風 ethos)

ロゴスに基づく大学教育

パトスに基づく僧侶の修行・布教

しかし日本の仏教は、日本人のエートスや状況に応じることによって、今日まで発展・存続してきた。

ロゴスを前面に出しては失敗する。 前面に出せないロゴスしかない点が、むしろ問題。

パトスを前面に出してもなかなかうまくいかない。パトスは価値観・世界観を共有したものの間でしか通用しないため。

エートスに着目すべき。さらには時代や環境にも配慮。それらに応じて教学(ロゴス)を再整備し、修行・布教(パトス)を実践していく必要がある。

実際、釈尊、お祖師さま、先師の方々は、そのようにされてきた。

本当に釈尊、お祖師さま、先師の方々を慕うのであれば、その方々の模倣をしなければならぬ。

仏教徒：釈尊に信順し、釈尊を規範となし、そして釈尊を模倣する人々の総称

「釈尊」を、お祖師さま、先師の方々と読み換えても全く同じ。

模倣

× 全く同じ行為をする

日本人のエートスを基本とし、時代や環境にも配慮する。そしてそれらに応じて教学(ロゴス)を再整備し、修行・布教(パトス)を実践する。

鈴木隆泰、釈尊の遺言 その現代的メッセージを読み解く、『山口県立大学大学院
論集』7、2006、pp. 1-18。

鈴木隆泰、『葬式仏教正当論 仏典で実証する』、東京：興山舎、2013。

釈尊（お祖師さま、先師の方々）を「過去の聖人」としてしまわないように。
仏教そのものを「過去の宗教」としてしまわないように。

まずは、私たち自身のロゴスとパトスとエートスの協調・一致を

鈴木隆泰、『お題目で送るお葬式 「南無妙法蓮華経」のお葬式・その意味と功德』、
東京：日蓮宗新聞社、2018。

鈴木隆泰ほか、現宗研 葬儀プロジェクト報告書、『現代宗教研究』53、2019、pp. 314-327。

前節の引用箇所からも分かるように、日蓮聖人の他界観はインド伝来のそれとは異なり、日本人の他界観をほとんどそのまま反映している。その象徴として、死後に魂が赴く（往詣する）浄土がこの世にある霊山という山である点と、その際に往生という輪廻転生を経験しない点（鈴木 [2018]） 追善供養が可能な点などを挙げることができる。したがって本宗の場合、「日蓮宗としての葬祭仏教」を教義レベルで整備することが可能であると判断される。これは本宗の大きな強みとなるであろう。

（以上）